

色彩感覚を育てる玩具

A2201213 佐藤美帆

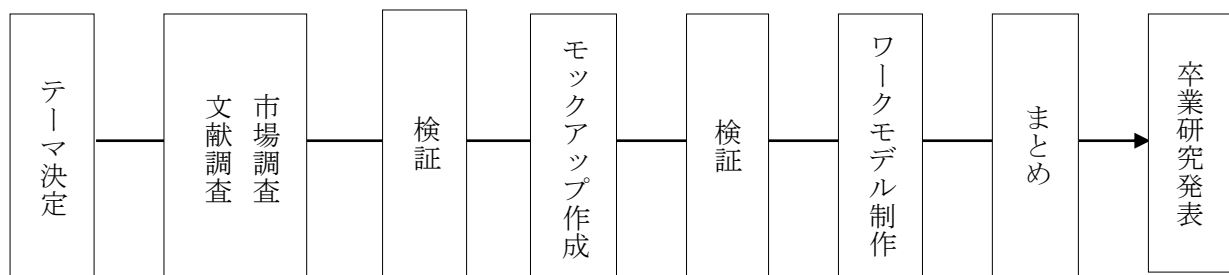
■研究の概要(背景)

日々の私たちの生活は色に囲まれている。「色」とは人が何かを表現する際に欠かせないものであり、人間の生活には常に「色」が存在している。私たちは色と色の組み合わせや、混色した際にそれがどんな色になるかといった色彩感覚を今では普通に理解している。その感覚はいつどのように養われるのか調査したところ、早稲田大学文学学術院教授:杉田陽一氏の「幼児脳の発達過程における学習の性質とその重要性の解明」には色彩感覚とは生まれながらに持っているものではなく、乳幼児期に後天的に得られるものであるとの研究結果がある。さらに岡山大学大学院教育学研究科准教授:大橋功氏による造形表現教育実践講義の資料では、色彩を意識して使うのは4歳前後であるということ、造形遊びや描画活動といった普段の遊びの中で色彩に触れることで幼児は色彩感覚を育てていくということがわかった。そこで「色」というものを意識し始める4歳前後の子どもが色彩に触れる機会を、遊びによって増やしていくことで「色」への関心を高め、より鋭い色彩感覚を育てていけるのではないかと想定し、4歳前後の子どもを対象とした幼児が生活の中で楽しく色を理解していくために有効な玩具の制作を試みたいと考えた。

■研究のねらい

現在子どもが抱える問題としてベネッセが行った「子ども生活実態調査」や文部科学省が発表している「現代の子どもの成長と徳育をめぐる今日的課題」には人間関係を形成する力の低下がみられ、いわゆる「群れを好む性質」などが挙げられている。この課題を解決する多くの考えの中の1つに幼児期の子どもを取り巻く教育環境(自宅なども含む)が考えられる。重要なことは自然あるいは人工のさまざまなものを見て経験しただけでなく、その経験によって得た楽しさなどの頭の中にあるイメージを親あるいは友だちと共有するための表現活動をすることである。その中に水彩絵具やクレヨン・色鉛筆で表現される描画活動があるが、この描画表現には色が必要不可欠である。そこで色彩になじませることを目的としたツールの開発をテーマとした。これは水彩絵具やクレヨン・色鉛筆といった消費されるものではなく、玩具としてずっと使用してもらえるようなものを目標としたことからである。今回の研究で制作した玩具によって色彩感覚育成の手助けになることを研究のねらいとする。

■研究のプロセス



モックアップ



ワークモデル



↑積み木(黄)



↑前面



↑後方 コンセント線部分



↑ライト点灯時

■成果物

立方体の形を取り、乳白色のアクリル板の上に積み木を置き、下方に電球を取り付けた。積み木の形は検討を重ね、従来の立方体や円柱などの形をした積み木よりも曲線を多く利用し、遊ぶ際に安全で、手になじみやすい形を目指した。積み木を重ねることで黄+青で緑を作ったり、青+赤で紫を表現出来たりと、色の重なりを感じられる。

子どもが安全に遊べるように配慮して、角を丸く加工するのはもちろんのこと、積み木の手触りなどにも配慮した。また、対象となる4歳前後の子どもがこの玩具を床に置いてしゃがんで遊ぶ際に子どもの目線や使用に不具合がない高さを取り、さらに1人で遊ぶには少し大きいサイズにすることで、子どもたちが友達とコミュニケーションを取ることができるようなサイズの検討を行った。

継続的に遊んでもらうことを目的としているため、遊び方の制限をしない。しかし積み木の手触りなどをなめらかにすることで長く触れていたいと思ってもらえるように加工した。

4歳前後の子どもの平均身長(cm)

	男子	女子
3歳	98.2	94.8
4歳	103.9	103.5
5歳	108.6	109.7

厚生労働省調べ

■考察

現在色彩感覚を育む方法としては水彩絵の具による混色やにじみ、クレヨン・色鉛筆等による描画活動が最も色彩の幅が広いことから用いられている。さらに積み木などで色と色同士の組み合わせ(配色)によって色彩感覚を育む方法もある。今回私が制作した玩具がそれらと違うことは普段自然光で見ている色と影に置いた時の色と光が当たった色とを比べることで色の恒常性を感じることができる部分にあると考える。

本研究を通して私自身は幼児教育への関心を高めることができ、保育関連や色彩学についての知識を深めることが出来た。また実際に遊んでもらう子どもたちと触れ合えたことで、よりユーザーに寄り添ったプロダクト分野の楽しさを感じることができた。